

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12546

研究課題名（和文）帝国都市アウクスブルクにおける水の利用と管理 給水システム、河川利用、水の記憶

研究課題名（英文）Water Use and its Management in the Imperial City of Augsburg -
Water-Supply-System, Rivers and Memories of Water -

研究代表者

渡邊 裕一（WATANABE, Yuichi）

福岡大学・人文学部・講師

研究者番号：30804314

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年注目を集める都市環境史の議論を踏まえ、帝国都市アウクスブルクを事例に、都市と自然環境との相互関係および都市の生活環境の実態を、都市生活に欠かせない必需品である「水」という問題領域に着目して解明することを試みた。新型コロナウイルス感染症の世界的拡大にともない、計画していたドイツでの資料調査を中止せざるを得ず、研究は計画通りに進んだとは言い難い。その結果、研究期間も一年間延期することとなった。ただし、2019年夏にアウクスブルクの給水システムおよび水経済が「ユネスコ世界遺産」に登録され、記念カタログや論文集が多数刊行されたこともあり、当初の目的はおおむね到達できたと考えらる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ユネスコの理念とは異なる歴史学的な意義を踏まえ、アウクスブルクの水利システムの歴史を整理した論文を『西洋史学』の特集「環境史の課題」に発表した。また、九州西洋史学会にてシンポジウム「ヨーロッパ史における水の資源化とその管理・統制」を企画し、「帝国都市アウクスブルクにおける水の利用とその管理」と題した研究報告を行った。さらに、中近世ヨーロッパ都市における水の管理・利用は、下水処理なども含め、都市の公衆衛生や生活環境とも深くかかわっていたことを解明し、中近世都市を何度も繰り返し襲ったペスト被害やその対策についても考察の対象を広めることができたのは、本科研プロジェクトの成果の一つともいえるだろう。

研究成果の概要（英文）：Based on discussions of urban environmental history that have been gaining attention in recent years, this study attempted to examine the interrelationship between the city and its natural environment from a case study of imperial city of Augsburg, focusing on "water," an essential commodity for urban life. Due to the COVID-19 pandemic, the planned survey to Germany had to be abandoned and, as a result, the study period had to be postponed by one year. However, our initial objectives were generally reached, partly because Augsburg's water supply system and water economy were registered as a "UNESCO World Heritage Site" in the summer of 2019, and a number of commemorative catalogs and academic papers were published.

研究分野：西洋史

キーワード：環境史 都市史

1. 研究開始当初の背景

本研究テーマを設定する背景としては、ヨーロッパを対象とした都市環境史の展開が大きな影響をもった。これまで環境史研究の議論をリードしてきたアメリカ合衆国では、かつて環境史といえ人の手の加わっていない“自然”を分析の対象とするのが専らであった。人類の歴史的な構築物である“都市”は、環境史の研究対象として認められない時代が長く続いたと言える。1990年代以降、合衆国の歴史学界でも、ようやく“都市”に注目する環境史の成果が現れるようになり、現在では毎年数えきれないほど多くの“都市”環境史の新たな成果が発表され、研究の進展は著しい。

2000年代以降、ドイツ語圏の環境史研究も、合衆国での研究動向に影響を受ける形で、都市に焦点を当てた研究成果が多く見られるようになった。しかし、ヨーロッパの都市を対象とする場合には、アメリカとは異なる特有な課題・難しさがあり、注意が必要である。例えば、ドイツ語圏を代表する環境史家のD・ショットが2014年に刊行した入門書には、「1000年から2000年まで」と副題が付されており、このことは環境史の視点からヨーロッパ都市の歴史を論じるためには少なくとも一千年にわたる年代幅を考慮する必要性があることを端的に示している【D. Schott, *Europäische Urbanisierung (1000-2000). Eine umwelthistorische Einführung*, Köln 2014】。さらにドイツには、マックス・ヴェーバー以来の都市に関する論争の積み重ねや重厚な個別研究の蓄積があり、その点もまた英語圏の議論とは一味違う難しさをドイツ語圏の都市環境史に与えている状況があった。本研究開始当初に求められているのは、従来からのドイツ都市史の重厚な研究蓄積をしっかりと批判的に継承しつつ、新たな環境史の視点を柔軟に取り入れながら、個別都市に即した実証研究を着実に積み重ねていく作業であった。その作業を通じて、環境史研究という今日的な課題に果敢に挑戦する新たな学問分野を単なるブームに終わらせず、確固とした土台をもつ歴史学の主要分野として構築することも期待される状況であった。

近年の都市環境史のなかで重要な検討課題として注目されているものの一つに、都市の必需品供給システム(「都市の物質代謝」論)の解明があった。そこで核心となる「問い」は、多くの人々が集まる「都市」において、住民たちの生活・生存に欠かせない必需品 食料品、燃料、飲み水などをどのように確保し、それを市内でいかに分配していたのかというものであり、日本史研究でも重要な問題提起として注目を集めていた【例えば、吉田伸之「舟運と薪 江戸の物流インフラと燃料」『都市 江戸に生きる』岩波新書、2015年など】。とくに、中世後期から近代にかけて展開した「長期にわたる都市化」を経験したヨーロッパでは、都市への必需品供給は都市当局が取り組むべき重要な政策課題でもあり、それぞれの都市がそのためにどのような政策を推し進めたのかという点も重要な問いであった。すでに申請者は、以上の問題意識から、博士論文において帝国都市アウクスブルクを事例にした都市の木材(燃料材・薪)供給に関する実証研究を完成させており、本研究では、分析の対象を木材から「水」へと移し、都市の給水システムおよび河川利用のありかたを正面から分析することとした。

また、研究開始当初、アウクスブルクでは「帝国都市の水経済および水文化」をユネスコの世界遺産に登録する試みが進行中であったことも本研究の課題設定の背中を押した重要な要素であった。帝国都市アウクスブルクを事例として歴史的な都市の水利用を分析する本研究は、まさに歴史(記憶)が現在(新たな意味づけ)と直結する課題であると同時に、地域(都市)のポテンシャルを考えるという今日的な課題にも挑戦できる魅力的なテーマであったと言える。

2. 研究の目的

本研究は、都市環境史の研究視角を踏まえ、中世から近世にかけての帝国都市アウクスブルクを事例にして、都市での生活に欠かすことができなかつた「水資源」に着目し、都市と自然環境の相互関係および近代以前における都市の生活環境の実態に接近することを目的とした。さらに、将来的な比較考察や比較都市環境史という新たな研究手法の確立にも貢献することが期待できる意義深い個別事例研究を完成させることを本研究の最終的な目標に設定した。

個別都市に即した環境史研究を構想する場合には、近年の環境史の動向だけではなく、それぞれの都市に関する様々な分野の研究蓄積やその新たな動向をしっかりと把握することが欠かすことのできない重要な作業となる。法制史、経済史、思想史、教会史、文化史など、一見すると環境史とは関わりがないと思われる分野にも幅広く目配りすることで初めて、各都市の特徴と研究の最新状況を踏まえた、環境史の視点からも意義深い問題提起を行うことが可能となるからである。重要なのは、都市を舞台とした「全体史」の枠組みの中で環境史を構想する視点であり、申請者は博士論文の執筆時からこの点を意識して研究を進めてきた実績があった。帝国都市アウクスブルクに関しては、B・レックによる穀物供給に関する先駆的な研究があり、燃料材・薪の供給に関しては申請者の博士論文の蓄積が存在する【B. Roeck, *Bäcker, Brot und Getreide in Augsburg. Zur Geschichte des Bäckerhandwerks und zur Versorgungspolitik der Reichsstadt im Zeitalter des Dreißigjährigen Kriegs*, Sigmaringen 1987; Y. Watanabe, *Waldpolitik und Holzversorgung der Reichsstadt Augsburg im 16. Jahrhundert*, 2018; <https://opus.bibliothek.uni-augsburg.de/opus4/37868>】。一方で、「水資源」に着目した研究については、一般向けの書籍や以下に述べる世界遺産登録に向けて作成されたパンフレット類は充

実しているものの、歴史的にいままだ解明されるべき点が多く残されている状態であり、その研究の穴を埋めることも本科研プロジェクトの具体的な課題の一つに設定した。

3. 研究の方法

本研究では、具体的に以下の個別テーマを設定し、上記の研究目的の達成を目指した。

(A) 都市の給水システムの確立とその変遷 井戸、水路、給水塔、水道

都市生活にとって欠かせない飲み水や手工業等の生業のための用水など、都市における給水システムの確立は、都市住民の生存を左右する重大課題であった。アウクスブルクでは、都市当局による飲み水の確保・供給政策は、15世紀前半まで史料的に遡ることが可能である。そこで、本研究では、一つ目の課題として、市内の水路システム、給水塔の設置、水道管による市内への飲み水供給、また井戸の立地等、とくに給水事業にとって欠かすことのできないインフラ整備に注目し、市内における給水システムの確立を分析する。さらに、給水システム確立のための、管理・運用体制の整備についても考察する

(B) 水の資源化 水の利用をめぐる社会問題

上記(A)の考察を踏まえ、水を利用可能にするプロセス全体を「水の資源化」と捉え、給水システムの確立が都市社会における日常生活や人間関係にどのような変化をもたらしたのかを考察する。井戸の所有形態やその立地、また水道設備の利用や、私宅への水道導入等、水の利用をめぐる公、共、私のせめぎあいの変遷を丁寧に追跡し、水利用をめぐる社会構造の変化を考察する。

(C) 水と都市の公衆衛生

さらに、都市の生活環境および公衆衛生にきわめて重大な意味をもった排水の問題にもアプローチを試みる。都市の健康と衛生管理は、中世後期から近世の都市にとって重要な統治課題であり、「良きポリツァイ」の重要な構成要因であったことが知られている【A. Iseli, *Gute Policey. Öffentliche Ordnung in der Frühen Neuzeit*, Stuttgart 2009】。「都市と水」というテーマに取り組む作業は、都市における疫病対策や公衆衛生といった新たな問題領域へのアプローチにもつながるはずである。

4. 研究成果

本研究は、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大にともない、計画していたドイツでの資料調査を中止せざるを得ず、計画通りに進んだとは言いがたい。現地での未刊行史料の調査は実施することができず、研究期間も予定より一年間延長する結果となった。ただし、2019年夏にアウクスブルクの給水システムおよび水経済が「ユネスコ世界遺産」に登録され、記念カタログや論文集が多数刊行されたこともあり、それらの最新の研究を活用することで、上記の研究方法で示した三つのテーマについて、以下の通り成果を発表することができた。

まず重要な成果として、帝国都市アウクスブルクの水利システムの歴史について、ユネスコ世界遺産の理念とは異なる歴史学的な意味を考察した論考を『西洋史学』(270号、2020年)上の特集「環境史の課題」に、「論文中近世ドイツ都市における給水システム 帝国都市アウクスブルクの事例から」を発表した。ここでは、上記(A)の課題に取り組み、都市の給水システムの確立を整理したうえで、中世後期から近世にかけての都市における水供給の歴史的な意味を問い直した。また、上記(B)の課題については、九州西洋史学会の2020年度秋季大会にてシンポジウム「ヨーロッパ史における水の資源化とその管理・統制」を企画し、「帝国都市アウクスブルクにおける水の利用とその管理」と題した学会報告を実施した。その成果は、『西洋史学論集』(58号、2021年)にて、同名の論文として発表した。さらに、上記(C)の課題については、2021年3月に京都民科歴史部会研究会のシンポジウム「身体へのまなざし」にて、「ペスト患者へのまなざし 中・近世アウクスブルクの疫病対策」と題した報告を行い、その成果は『新しい歴史学のために』(299号、2021年)上にて、同名の論文として掲載された。中近世ヨーロッパ都市における水の管理・利用は、下水処理の問題も含め、都市の生活環境や公衆衛生とも深く関わっていたことがわかり、14世紀半ばの黒死病以降、数百年にわたって各地の都市で蔓延を繰り返すこととなるペスト被害およびその対策という問題領域にも関連していることを解明した点も、本科研プロジェクトの成果の一つと言えるだろう。ペストに焦点を絞った都市の疫病対策や健康ポリツァイの問題が、新たな課題として浮上してきたと言える。

上記論文にくわえ、本科研にも関わる著作の書評および史料翻訳も成果として発表した。そのなかで特筆すべき成果としては、「〔書評〕アルフレート・ハーファー・カンパ著、大貫俊夫・江川由布子・北嶋裕編訳、井上周平・古川誠之訳『中世共同体論-ヨーロッパ社会の都市・共同体・ユダヤ人』、『史林』(102巻5号、2019年)」、「〔書評〕渡辺浩一/マシュー・デーヴィス『近世都市の常態と非常態 人為的自然環境と災害』、『史潮』(新90号、2021年) および「〔史料解題・翻訳〕アレクサンダー・ベルナーの救貧制度調査報告記(2) ニュルンベルク」、『エクフラシス』(9号、2019年)が挙げられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 渡邊裕一	4. 巻 299巻
2. 論文標題 ベスト患者へのまなざし 中・近世アウクスブルクの疫病対策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新しい歴史学のために	6. 最初と最後の頁 21-35頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊裕一	4. 巻 270号
2. 論文標題 中近世ドイツ都市における給水システム 帝国都市アウクスブルクの事例から（特集：環境史の課題）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 64-78頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊裕一	4. 巻 58号
2. 論文標題 帝国都市アウクスブルクにおける水の利用とその管理（シンポジウム「ヨーロッパ史における水の資源化とその管理・統制」）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 56-61頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊裕一	4. 巻 新90号
2. 論文標題 〔書評〕渡辺浩一／マシュー・デーヴィス『近世都市の常態と非常態 人為的自然環境と災害』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史潮	6. 最初と最後の頁 115-123頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊裕一	4. 巻 56号
2. 論文標題 〔書評〕踊共二編著『記憶と忘却のドイツ宗教改革 語りなおす歴史 1517-2017 』（ミネルヴァ書房、2017年）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋史学論集	6. 最初と最後の頁 44 - 47頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊裕一	4. 巻 102巻(第5号)
2. 論文標題 〔書評〕アルフレート・ハーファーカンブ著、大貫俊夫・江川由布子・北嶋裕編訳、井上周平・古川誠之訳『中世共同体論 ヨーロッパ社会の都市・共同体・ユダヤ人』柏書房、2018年	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史林	6. 最初と最後の頁 94 - 100頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡邊裕一	4. 巻 第9号
2. 論文標題 〔史料解題・翻訳〕アレクサンダー・ベルナーの救貧制度調査報告記（2） ニュルンベルク	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 エクフラシス	6. 最初と最後の頁 68-74頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊裕一
2. 発表標題 中近世アウクスブルクにおけるペスト対策と健康ポリツァイ 課題と展望
3. 学会等名 比較都市史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 渡邊裕一
2. 発表標題 帝国都市アウクスブルクにおける水の利用とその管理
3. 学会等名 九州西洋史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊裕一
2. 発表標題 帝国都市アウクスブルクの給水システム 井戸と水道を中心に
3. 学会等名 早稲田大学西洋史・甚野ゼミ研究室 オンライン研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 渡邊裕一
2. 発表標題 中・近世ドイツ都市における給水システム 帝国都市アウクスブルクの事例から
3. 学会等名 ヨーロッパ地域史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊裕一
2. 発表標題 中近世アウクスブルクにおける都市と水 研究の展望
3. 学会等名 九州西洋経済史ゼミ合同研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渡邊裕一
2. 発表標題 コメント：南ドイツ史および災害史の視点から フィリップ・ドラング『ハンザ 12 17世紀』（みすず書房、2016年）合評会
3. 学会等名 日本ハンザ史研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 福岡大学人文学部歴史学科	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 248
3. 書名 18歳からの歴史学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関